

長老教会宣教師ヘンリー・ボーベンカークの生涯

—日本での戦中戦後における活動を中心に—

辻 直 人

はじめに

ヘンリー・ボーベンカーク (Henry George Bovenkerk, 1904-1990) は1930年に来日し、1年間明治学院で教えた後、1932年より三重県津市で宣教活動をしていた米国長老教会宣教師である。彼は戦後、日本の諸教会やキリスト教学校が復興する上で、アメリカ諸教会との間に立って、支援を日本にもたらす重要な役割を担った。しかし、彼の名は現在に至っては広く記憶に留められていない。本稿は、戦時下キリスト教史及び戦後日本のキリスト教復興期を研究するにあたり、無視することのできない存在であるボーベンカークの人物像やその働きについて明らかにすることを目的とする。それは、個人を顕彰するためではなく、あくまでも戦時下と戦後の日本キリスト教史を考察するための基礎的作業として行うものである。

筆者が編纂執筆に関わった『キリスト教学校教育同盟百年史』（教文館、2012年）の編纂過程において、戦後のキリスト教学校の復興と関連して基督教事業連合委員会（Interboard Committee for Christian Work in Japan, 以下IBCと略記）の史料を目にする機会を与えられた。IBCとは、戦後日本のキリスト教会及びキリスト教学校の復興を人的財

的に援助するために1947（昭和22）年4月に作られた団体で、日本基督教団に所属している8教派、すなわちPresbyterian Church in the USA（米国長老教会）、Reformed Church in America（アメリカ改革教会）、Methodist Church（メソジスト教会）、Congregational Christian Church（組合教会）、Christian Church（Disciples）（デイスイプル派）United Church of Canada（カナダ合同教会）、Evangelical United Brethren（福音同胞教会）、Evangelical Reformed Church（福音改革教会）によって組織されたアメリカ諸教派の連合団体である。IBCが日本基督教団、基督教々育同盟会（現・キリスト教学校教育同盟）と三者で内外協力会（CoC）を組織し、アメリカ諸教派からの援助の配分や更なる必要について話し合った。その際、ニューヨークにいてアメリカ側の窓口役を担ったのがボーベンカークである。

本稿をまとめるための史料として、基本的にフィラデルフィアにある長老教会歴史協会（Presbyterian Historical Society）に所蔵されているボーベンカークのForeign Missionary Vertical Filesを用いた。本文中特に断りのない参考史料は、全て同協会所蔵のファイルに含まれているものである。史料のほとんどは英文であるので、以下本文で引用する場合は全て筆者の私訳による。

1. 生い立ち、日本に来るまで

1904年10月シカゴ生まれのヘンリー・ボーベンカークは、自分の育った家族のことを「20世紀を代表するであろうカルヴァン主義の家」だったと振り返っている⁽¹⁾。ヘンリーが8歳の時、父ジョン・ボーベンカークが改革教会の神学校であるウェスタン神学校へ入学するためにシカゴからホランドへと移住した。ジョンは神学校を卒業後、まずはデトロイ

ト第一改革教会の教職者として3年過ごしたのちに、今度はミシガン湖対岸にあるマスキーゴン（Muskegon）第一改革教会に牧師として赴任した。

高校卒業までをこのマスキーゴンで過ごした息子ヘンリーは1923年、同市より南に30マイル下ったホランドにあるホープ・カレッジに入学し、1927年に同大学を卒業した後は父と同様にウェスタン神学校へ進学した。この経歴から分かるように、本来ボーベンカーク家は改革教会に属する教理を信仰の基準としていた。しかし、ヘンリーが日本へ派遣される時は長老教会海外伝道局から派遣されている。その理由は、改革教会の海外宣教師派遣に対する経費不足（lack of fund）だった。

ヘンリー自身は、自分の信仰告白について何か具体的な経験があったのではない、と述べている。一方で、ヘンリーは信仰を自覚するようになってから宣教師になって海外に行くことを夢見ていたという。ある日曜の夕方、13歳の時⁽²⁾、アラビアに派遣された宣教師ジョン・ヴァン・エス（John Van Ess）博士の話をデトロイト教会で聞いた。この時以来、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしろ」というマタイ福音書28章19節にあるキリストの宣教命令に個人的使命を覚え、また帰国した宣教師との交流や彼らの伝記などを読んで更に宣教師への思いを強くしていった。

ホープ・カレッジ及びウェスタン神学校出身者には日本に宣教師として派遣された人も多く、アルバート・オルトマンズ（Albert Oltmans, 1854-1939, 1886年来日、明治学院には1902年より赴任）以降、改革教会から日本に派遣された宣教師は、ほぼ全てホープ・カレッジとウェスタン神学校出身である。ボーベンカークが同大学に在学中、教授陣にアルバート・ピータース（Albertus Pieters, 1869-1955）がいた。ピータースは1891年来日し長崎の東山学院で働いた後、1923年に帰国してホープ・カレッジの聖書学科（Bible Department）で教えてい

た。その後1926年から1939年まではウェスタン神学校で英語聖書学及び宣教学を担当する教授も務めている。ピータースから直接教育を受けたことは、ボーベンカークの日本への思いをかき立てることになった⁽³⁾。ピータースは長老教会海外伝道局宛にボーベンカークの推薦状を書いており、「ヘンリー・ボーベンカークよりも宣教師の働きに適した人物には会ったことがない」と強力に推薦している⁽⁴⁾。

大学生の時はYMCA活動や学生ボランティア運動 (Student Volunteer Movement) に熱心に取り組んだ。1920年代のYMCAは、第一次世界大戦後の国際親善を強調する傾向があり、Committee of International Friendship among Foreign Studentsという下部組織を結成して、大学キャンパス内外の外国人学生との交流を盛んに企画していた。ホープ・カレッジYMCAの活動はまだ調査不十分であるが、例えばミシガン湖を挟んで対岸にあるイリノイ大学YMCAでは上記の活動が盛んで、中国人や日本人らの親睦を深める機会がよく設けられていた。同志社総長や国際基督教大学初代学長などを歴任した湯浅八郎はイリノイ大学で1920年代にPh.Dを取得しているが、在学中YMCAで自身の信仰や国際的視野を育てられたという⁽⁵⁾。恐らくボーベンカークにとっても、YMCAの果たした役割は湯浅と同様だったかもしれない。

日本への宣教師としての派遣が決まったのは1930年4月7日だった。同年、神学校を卒業すると同時にHester Angeline Ossewaardeと結婚 (7月)。その直後の8月にサンフランシスコを出港して9月に横浜に到着し、日本での宣教活動を開始した。

2. 農村伝道への取り組み

ボーベンカークと明治学院との関わりについては来日最初の1年間、

すなわち1931年度に中学部の教員に名を連ねている。残念ながら明治学院における活動については、詳細を知ることのできる史料が今のところない。僅か1年間の教員生活を経て、ボーベンカークには新たな活動として3つの選択肢が示された。その選択肢とは、第一に東京郊外での宣教活動に従事すること、第二に大阪での地方伝道に携わること、そして第三に三重県津市の工業及び農村地域での宣教活動に取り組むことであった。当時、津市の人口は6万人、県全体でも200万ほどの人口であり、その地域に住んでいる外国人家族はほとんどいなかったが、活動の範囲が拡大すれば宣教の働きも広がっていくことなので、ボーベンカーク一家は1932年から三重県津市に入ることを決断し、転居することになった⁽⁶⁾。

津市内でボーベンカークは、まず初めに男子生徒やビジネスマンを対象とした聖書の学び会をいくつか開いた。三重県にはキリスト教学校もなく、1938年9月16日付米国長老教会海外伝道局宛書簡によれば、この数年で、三重で活動した宣教師はボーベンカーク夫妻の他には1名のみだった。その英国女性宣教師は、「テント・ミーティング」を実施して、キリスト教について何も知らない地域住民の興味を掻き立てていたという。それだけまだ教会そのものの活動が弱く、外国人宣教師も珍しい土地だった。

しばらくして、ボーベンカークは都市部よりも農村部での伝道に関心を向けるようになる。何故農村伝道に目を向けようと考えたのか。当時の伝道活動は圧倒的に都市部で行われ、日本人クリスチャンも都会育ちがほとんどである。しかし、実際に人口の半分は農村漁村に住んでいる。1%にも満たない日本のクリスチャン人口を拡大するためにも、農村部への働きかけが大事であると考えていたからであった⁽⁷⁾。

つまり、農村部の人たちと直接関わりを持ちたいと願い、また宣教師宅の生活が伝道の一手段となることを願って、更には、隣人となる農

民たちの生活様式に少なくとも近づいてみたいと望み、農村部に住むことを決めた⁽⁸⁾。日本人であってもよそ者が農村部に入って信頼を得ることは難しいものであり、よそ者（ましてや外国人）が、農村部で家を見つけるのは、通常は大変困難な話であった。街に住んでいる日本人の友人などの手伝いで、4か月ほど探し続けてようやく一軒の空き家を見つけると、村長がさっそく歓迎してくれて、地域の人たちの交流も保証してくれた⁽⁹⁾。家の掃除も地域の女性たちが担ってくれたそうである。こうして1934年、地域の人たちの温かい歓迎を受け、夫婦と2人の子ども4人家族は津市郊外芸濃町棕本の家に移り住み、一家は10世帯の「隣組」に受け入れられた⁽¹⁰⁾。ボーベンカーク家は日本の風習として「手の込んだ土産」（具体的には不明）を持って近隣の家々を挨拶して回った。古い習慣の残る日本の農村地域に溶け込もうとしている姿が分かる。

その地域ではアメリカ人は珍しかったこともあり、近隣住民は興味津々で、毎日のように突然訪問してきたと言う⁽¹¹⁾。地元の新聞記者からも取材を受け、「青い眼のお百姓」（大阪朝日新聞、1934年10月13日）という見出しで紹介もされた。

3. 具体的活動内容

津におけるキリスト教宣教活動として、以下のような子ども向けの活動、学生向けの活動、工場労働者向け活動の3種類に主に取り組んだ⁽¹²⁾。

津にはミラー幼稚園（美良幼稚園）と呼ばれるキリスト教主義私立幼稚園があり、2名の教諭が保育にあたっていた。ボーベンカーク夫妻はアメリカの幼稚園で成功している点を紹介したり、特別な機会には講演をしたりしていた。

また、バイブル・ウーマンが開いていた平日の聖書教室（weekday

Bible school)には地域の中等学校から800から900もの生徒達が集まってきたと言う。1938年5月19日付海外伝道局宛書簡でも、Week-day Religious Education Schoolという名前で活動が紹介されているが、そちらでは1100人の子どもが登録し平均750人が集っている、と報告されている。教室は2か所で開かれ、官立小学校の近くにあり、放課後に子ども達が集まってきた。最初は低学年から集まり、教室が狭いので上級生が集まり始めると下級生たちは外に追いやられることになった。どれほどの広さかは定かでないが、一度に子どもたちが入りきらないくらい、子ども向け聖書教室は盛況だった。

津市内の宣教師館は高等女学校と隣接していたため、女学校生徒との交流も盛んで、彼女らのための聖書教室も校長室や職員室で平日に行われていた。

更に、津市内には師範学校と官立農業学校があり、師範学校では学生向けに2つの聖書クラスを持ち、また宣教師館を開放して学生たちと交わりを持っていた。農業学校とは余り関わりを持てなかったが、農村伝道への関心から同校教授たちとの交流を持てるようになっていった。中でも、教授陣の中に3代目クリスチャンがおり、ボーベンカークは教授と親しくさせてもらえたことを喜ばしいことと受けとめている。

このように、幼稚園から高等女学校、高等専門学校に及ぶ若い世代に広く働きかけていたことが分かる。

ボーベンカークの活動は子どもや学生を相手にしただけではない。津には3つの工場があった。街では、全般的に低い建物が多い中、工場の高い煙突がひとときわ際立っていた。そのうち2つは紡績工場であるが、そこでの労働者は基本的に女工である。ボーベンカークは工場内の講堂を利用し、女工と集会を持つ機会を持つことができた。1つの工場では参加者が350から400人に達し、ほぼ100%の女工が参加していたそうである。もう1つの工場は仏教徒による反対もあり、15から20%の従

業員が参加した。このように、ボーベンカークは教会を中心とするよりも、地域社会に出て行って、若い世代を中心に聖書を学ぶ機会を学校や工場などで設けていった。

特に地方伝道をするにあたり、家族でそこに滞在しているというのは計り知れないほどの影響力を持っていたとボーベンカーク夫妻は捉えていた⁽¹³⁾。まだ幼小だった子ども達はよく紡績工場での集会で日本語や英語の歌を歌ったそうだが、アイドルのようにかわいがられた。夫妻も、親として、夫婦としての振るまいが周囲から注目されていたことを自覚していた。周囲には親しく接する人ばかりでなく、常に治安上からも監視された状態で、他宗教に属する人たちや警官らの目にも気を配りながらの生活を迫られた。頻繁に地元警察が訪問するようになり、多い時には1週間に1度訪問する時もあった⁽¹⁴⁾。訪問するのは私服警官なので人目に付かなかったから、誰が何処で見ているか常に気にしながらの生活だった。ただし、住民とは友好的な関係を築けたため、戦時中大阪で警察がボーベンカークをスパイ容疑で取り調べた際、津の友人や近所の人たちにも取り調べが及んだが、彼らからは好意的な反応しか出てこなかったという⁽¹⁵⁾。

1938年9月16日付海外伝道局宛書簡には、地域での物資の欠乏について報告が綴られている。南長老教会の友人は、皮、鉄、綿、羊毛、ガソリンといった物資が不足している状況を歌にしたほどで、役人らが住民の団結や質素な生活（結婚式や葬式を簡略な様式にすることなど）が奨励している街の様子を本土に報告している。ここから、既に津では、1938年より戦時体制を支えるために、日常生活において市民に儉約が強いられていた状況が分かる。砂糖や食用油、小麦粉も配給制になっていった。商人の中には、配給制になる直前に数キロの白糖をこっそりと売ってくれたこともあった⁽¹⁶⁾。宣教師に売ってくれたということは、買えるだけの資金を持っていたこともあるだろうが、宣教師への人望も

あったからと想像できる。

生活の窮乏を覚えつつも、1939年12月21日付の書簡では農村教区の建物（Rural Parish Building）が完成したと報告されている。この建物には住居の他、託児所（day nursery）と教会が入っている。かつて津で宣教活動をしていた人物から500円の献金があり、従来の計画では無理だった託児所と礼拝堂の併設が可能になった。

以上見てきたように、戦時体制が整えられていく1930年代の地方都市において、地域住民に認められながら、ボーベンカークは自らの宣教活動を地域に浸透させていったのである。

4. 捕虜収監、強制送還

1930年代後半になると、大都市では緊迫した世界情勢から、外国人は早く帰国した方がいいと騒ぎになっていたようであるが、地方ではそれほどほどの張り詰めた雰囲気を感じてはいなかったと言う⁽¹⁷⁾。日中戦争やヨーロッパにおける戦争の状況については、ボーベンカークのところには大した情報は伝えられていなかった。ただ、1938年から真珠湾攻撃までの期間に中国宣教師たちが訪ねてきて、日本軍が中国市民を「無慈悲（ruthlessness）」に支配している様子を話して聞かせたことをボーベンカークは書き記している⁽¹⁸⁾。雑誌や新聞では正確な情報を得られなかったが、宣教師間では日中の政治状況、宣教状況に関して情報交換がなされていたことが分かる。

1940年のクリスマス頃、海外伝道局は日米関係における緊張の高まりと危険性を察知し、全ての女性と子どもを本国へ帰国させるよう電報で伝えてきたため、1941年2月に、夫人のヘスターと子ども達を含め、8人の宣教師夫人と13人の子ども達が鎌倉丸に乗って帰国した⁽¹⁹⁾。徐々に日本と同盟国は軍事衝突の方向へと進んでいることが明らかになって

きた。41年の春、ヘンリー・ボーベンカークは日本人の友人や宣教師たちと昼食を取っている時、戦争が起きるのかどうか、ではなく、いつ戦争が始まるのか、という話題になったことを記憶している⁽²⁰⁾。日米間で戦争はいずれ起きるものと考えられていたのである。

外国人宣教師は日本国内にいても、自由な移動ができなくなり、いちいち地元警察に列車に乗る許可を得なければならなくなった。1941年の秋、北陸女学校での理事会に出席してほしいと要請を受けたので大阪府警に許可を求めたところ、大阪・金沢の往復車中と会議中までも警官が隣に付き添ってきた（会議中は中澤正七校長が知事に訴えたため退席した）。

津から大阪へ転任することになったのは、妻と子ども達が帰国した後のことである。同僚から、津に戻るよりも大阪の長老教会宣教師たちの住む宣教師館に住むことを強く勧められて、転居することを決めた。大阪は津よりも更に食糧を得ることが困難で、街の雰囲気も津よりも緊迫していたと言う⁽²¹⁾。

しばらくして新聞に、アメリカ行き日本客船に本土退去を願う人のための乗船余地があることが報じられたので、1941年12月2日、家族とクリスマスを過ごすためにヘンリー・ボーベンカークは仲間の長老教会宣教師ジョン・スミスと共に龍田丸に乗船した。しかし、帰国のため太平洋上を航海している最中に、真珠湾攻撃が起きてしまった。最初、乗客たちは事情が分からず、船が突然旋回して西に航路を取り始めたことで、船上は大騒ぎになった。ようやく、掲示板に「この船は、日本帝国政府の命令で日本へ引き返すことになった」と貼り出されたことで、事態を飲み込むことができた。乗客たちは横浜到着後、高い壁に囲まれた“Yokohama Yacht Club”へと連れて行かれ、3ヶ月間収監された。そこには、全部で32人が収容されていた。彼らは収監中カミソリなど刃物を使うことが許可されなかったので、髭は伸び放題だったと言う。

3ヶ月後の1942年2月、大阪へと移送され取り調べを受けた。日々の取り調べでは、日本語で書いた説教について問いただされた。警察側は、説教の内容は危険な思想で満たされていると主張してきた。特に、聖書における神の国と日本の神の国の違いについて、神による統治と天皇の神聖性について焦点化され、こうした部分の言及に有罪の可能性があるとの示唆を受けた。また、スパイの容疑もかけられていたので、大阪では全く孤立した状態で収監された。更に神戸に移送されたが、取り調べ調書の不備が指摘されたために起訴は取り消され⁽²²⁾、1942年夏横浜より強制送還された。

帰国後しばらくはミシガン州の家族と共に過ごしたが、日本で収監されていた経験が却ってアメリカに活かされることになった。長老教会国内外宣教局が日系人収容所で何か働きができないか模索することになり、ボーベンカークはいくつかの日系人収容所を調査して回った。中でも、カリフォルニア東部のマンザナール収容所（Manzanar War Relocation Center）の訪問はボーベンカークの新しい役割を与えることとなった。同地の教会を訪問した時、連邦局員と面会する機会があった。彼らはボーベンカークが日英二か国語を話すことができることが分かると、その日の午後に開かれる収容日系人との話し合いに参加するよう頼んできた。実際日系人の話を聞いてみると、有刺鉄線で囲まれた彼らの生活は財産の没収や生活の制限があるとはいえ、自分が日本で収監されていた状況よりはまだ自由があることを知った。マンザナールには日系人プロテスタント教職者が6人いたが、いずれもたどたどしい英語しか話せず、2か国語を話せる人がいなかった。このような状況で、2か国語を話せるボーベンカークは自らの役割を自覚し、収容所近郊に家を借りて家族で住み、civilian Chaplain and counselorとして活動した⁽²³⁾。

2年マンザナールで奉仕した後、徐々に日系人の強制収容も解消され

ていく過程で、デトロイト第一長老教会より、次の常勤職が決まるまで教会の働きを手伝うよう要請があり、副牧師として1945年1月にデトロイトへ一家で転居した⁽²⁴⁾。

5. 戦後の活動

太平洋戦争の終結は、ボーベンカークに新たな活動の場を提供することになった。

デトロイトの教会に転任して、ボーベンカークは自身の日本での強制収容や日系人たちの収容所生活についての話を周囲から求められた。話をするたびに、困難を共有した日系人たちと自分とを重ね合わせていたと語っている⁽²⁵⁾。しばらくして1945年の後半、すなわち太平洋戦争も終戦を迎えた後のこと、ボーベンカークは当時ニューヨークに滞在していた改革教会宣教師ルーマン・J・シェーファー (Luman J. Shafer) から電話をもらった。シェーファーは戦前戦後とフェリス女学校の校長を務め、戦時下アメリカに帰国後、外国宣教会議 (Foreign Missions Conference) 日本委員会議長の役を担っていた。この委員会は日本を対象とするあらゆる北アメリカミッションボードの働きに全面的な権限を持っていて、日本への宣教活動を再開しようと考えていた。この計画は連合国最高司令部 (SCAP) からも承認を得ており、日本に予備調査のため東京に教会関係者を派遣したいと考えていた。シェーファーは予備調査のメンバーにボーベンカークを指名したのである。

最終的に選ばれたのはアリス・キャリー (Alice Cary)、アーネスト・バット (Ernest Bott)、ジョン・コブ (John Cobb)、カール・クリーテ (Carl Kriete) とヘンリー・ボーベンカークの6名で、「外国宣教協議六人委員会 (Commission of Six of the Foreign Missions Conference)」の一員として1946年7月に再来日、日本に最初に戻っ

てきた宣教師の1人となった。この6人はいずれも日本に宣教師として派遣された経験があり、日本の教会とキリスト教学校の再建を指揮し日米の教会の協力関係を築ける権限が与えられた。また、個々の教派が独自に活動するのではなく、アメリカ側にも日本基督教団に統合された諸教派と一致した組織作りが課題となった⁽²⁶⁾。

再来日直後の書簡では、日本の様子について次のように報告している⁽²⁷⁾。すなわち、その時点ではまだ教会出席者は少なく、都市にある大きな影響力のある教会でも、戦争前の出席者と比べて半分ほどしか集まっていなかった。ただし、牧師たちは戦後の新しい時代をキリスト教にとって重大な機会と歓迎していた。社会においては、キリスト教に対する悪意に満ちた宣伝はもはやなく、牧師たちも外国の手下と疑われることもない。アメリカ軍はチャプレンを必要としている。また、キリスト教学校は公立学校よりも早く復興し、学生数は収容人数を超えるほどであった。キリスト教学校や教会に前向きな風が吹いている様子が分かる。

一方、様々な日本人クリスチャンと面会することで、戦中の彼らの様子も知るようになった。例えばライシャワー博士宛書簡には、次のような日本の様子が描かれている⁽²⁸⁾。すなわち、ある牧師は「私は戦時中、国家への忠誠と信仰との間で引き裂かれていた。もし日本が勝ったら、キリスト教は更に（悪い方向に）進んでいっただろう。少なくとも、当時は日本が負けるとは考え難かった。大衆の前で公然と私は主の意思が働かれ、全てが主の摂理の下で進んでいくようにと祈った。個人でも同じように祈っていた。」と語った。また、キリスト教学校では、生徒たちの間に義務的な礼拝への反抗意識がある。民主主義は基本的に自分の喜ぶことをすることという考えが生徒たちの間に広がっている。牧師たちはひ弱で痩せていて、宣教師に向かって「君たちは太って健康に見える」と言う。家族と自分たち生活に必要な食糧を手に入れるのが困難で

十分な量が出回っていないので、闇市で手に入れるしかない状況だった。農作物も徐々に市場に出てきているが、国会が統制しやすいように、米や配給品の値段が妥当かどうかを判断している。これが本当のことであるなら、牧師たちは必要な品物と十分な収入を得ることができない。ほとんどの牧師は副業や親族、大農場によって生計を成り立たせている、と生活に困っている様子が紹介された。

同書簡では、六人委員会のメンバーでクリスチャン国会議員と数度会合を持ったことも報告されている。当時、国会議員の中には60名ものクリスチャンがおり、最初の会合では、彼らと礼拝の時を持った。更に別の機会には社会や労働状況について、日本の将来とキリスト教の見通しについて話し合ったと言う。

ボーベンカークにとって連合国に守られて交通や住居など生活面で保障されている自らの待遇と対照的に、キリスト教指導者たちの「哀れにやつれた外見 (pathetically gaunt appearance)」が印象的だった⁽²⁹⁾。山本忠興、富田満、小崎道雄らと面会し、彼らが戦時中経験した苦痛や緊張に思いをはせると共に、十分な食事を取れている自分の状況を恥じる思いも持っていた。こうした日本キリスト教界の状況を目の当たりにして、日本への支援の思いを強くしたことだろう。

更に長老教会の関係する女学校、すなわち大阪女学院に関するレポート(1946年7月11日)、北星女学校に関するレポート(1946年7月31日)、女子学院に関するレポート(1946年8月13日)、北陸女学校に関するレポート(1946年8月14日)を立て続けにアメリカ側に送付し、復興する上での支援の必要性を訴えた。つぶさに戦火で荒廃した日本各地を見て回り、アメリカから供給すべき物品一覧や食品一覧も作成してアメリカ側に提案している。こうした視察行動が、その後具体的に日本とアメリカ側の橋渡し役として活かされることになる。

1947年からはIBCの事務局長 (secretary) として本部のニューヨー

クと東京（GHQ/SCAP）や内外協力会と連絡を取り合い、戦後の教会やキリスト教学校の復興に貢献した（1948年10月1日まで）。

実は、アメリカ側には、戦前のような教派別宣教を志す熱意を持っているミッションボードも存在した。六人委員会としてはこうした教派主義を打破したいと考えており、日本委員会側も、委員の誰かがニューヨーク本部に戻り、この課題に取り組んでほしいと要請してきたため、ボーベンカークが戻る事となった。1941年に成立した日本基督教団が戦後も解散せずに組織として維持されたことにつき、土肥昭夫は「教団に合同教界としての意義を再発見し、これをささえようとする人たちがあった」ことと、「北米の八つのミッションが教団の支持協力のために連合委員会（IBC）を結成した」ことで「ミッションとの関係のために、教団が分裂するという事態は回避された」と述べている⁽³⁰⁾。土肥の説明では、日本側の超教派的合同としての日本基督教団に理解を示し、教団の体制に見合う形でアメリカ側が支援団体を組織したかのように受け取れる。しかし、実はアメリカ側でも超教派としての戦後復興支援を維持しようとした動きがあり、ボーベンカークら日本委員会と六人委員会の宣教師たちは教派主義に再び陥ることを阻止すべくIBCを立ち上げて、日本の教会やキリスト教学校の支援をしようとしていたのである。つまり、日本基督教団の維持はアメリカ側の意向でもあった。

その後のボーベンカークであるが、IBCの働きを終えた後、1950年代にはアメリカ改革教会世界宣教局（the board of the World Mission of the Reformed Church in America）の働きに加わり、更にその後はアジアにおける世界識字率及びキリスト教文学に関する委員会財務取締役（director of finance of the Committee on World Literacy and Christian Literature in Asia）に就任するなど、アジアや世界への宣教活動に長く関わった。1970年に一度引退するが、今度は教会教職者としてウェストフィールド長老教会（Presbyterian

Church in Westfield) で奉仕し、ニュージャージー州のエリザベス第一長老教会 (the First Presbyterian Church in Elizabeth, N.J.) でも暫定牧師 (interim minister) を1985年まで務めた⁽³¹⁾。

おわりに

今回はヘンリー・ボーベンカークの史料を紹介することで、その生涯を概観した。今後、ボーベンカークの日本宣教での役割を更に検討することが今後の課題である。

今回の考察で、特に数点において、彼の生涯と活動は注目に値すると思われる。1つには、早くから農村伝道に目を向けていたという点である。都市部を中心に展開していた宣教師の活動を農村地区に広げようとするその活動の意義については、改めて日本のキリスト教宣教史を考察する上で大切な取り組みであろう。第二として、戦中の外国人捕虜の問題である。ハナフォードやスミスなど同じく捕虜になった宣教師もいた。また、戦中ボーベンカークらのように強制送還された例もあれば、日本に戦時中とどまった宣教師もいた。こうした実態について、彼等への日本軍や日本社会の扱い方について考察することも、戦時下キリスト教史研究として追求すべき課題であろう。また帰国後、強制収容された日系人の慰問に積極的に関わった宣教師は多い。こうしたアメリカ西海岸における日系人とキリスト教の関係も大変興味深いテーマである。

更に、ボーベンカークの場合、戦後日本におけるキリスト教会、キリスト教学校の復興に大きな役割を果たしている。キリスト教界の戦後復興に果たした宣教師の役割は、今後IBCなどの研究と共に注目されていくテーマであろう。

地方都市と農村部にいたからこそ、他の宣教師には見えない日本の姿を知りえた。特に一般大衆の生活に対する共感を抱いたからこそ、戦

後はいち早く日本の復興に協力しようとしたのではないだろうか。

ヘンリー・ボーベンカークは1990年、ニュージャージーで86年の生涯を閉じた。

注

- (1) Sketch of Myself HB129
- (2) *Living With Asians in Partnership, Memoirs of Henry G. Bovenkerk*, p.1
- (3) *Ibid.*, p.1
- (4) "Candidate Reference Blank", January 17, 1930
- (5) "Japan, Dr. Hachiro Yuasa, Doshisha University, 1934-46", イリノイ大学資料室所蔵
- (6) *Living With Asians in Partnership, Memoirs of Henry G. Bovenkerk*, p.2
- (7) Hester and Henry Bovenkerk, *Thatch-Roofed Japan*, p.1, The Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church, USA, 1936
- (8) Hester and Henry Bovenkerk "Village Life — A Missionary Family's Experience", *Japan Christian Quarterly*, Vol. X, No. 3, Summer Number, July 1935, pp.224-230
- (9) *Thatch-roofed Japan*, p.4
- (10) Station Letter, Tokyo Japan Mission, March 1936
- (11) *Thatch-roofed Japan*, p.5
- (12) Henry G. Bovenkerk, "In Rural Japan", *Women and Missions*, March 1934, p.387
- (13) *Living With Asians in Partnership, Memoirs of Henry G. Bovenkerk*, p.3
- (14) *Ibid.*, p.4
- (15) *Ibid.*, p.3
- (16) *Ibid.*, p.4
- (17) *Ibid.*, p.4
- (18) *Ibid.*, p.5
- (19) *Ibid.*, p.5, p.31

- (20) *Ibid.*, p.6
- (21) *Ibid.*, p.31
- (22) *Ibid.*, p.38
- (23) *Ibid.*, pp.47-48
- (24) *Ibid.*, p.49
- (25) *Ibid.*, p.50
- (26) *Ibid.*, p.50
- (27) "Informal Report on Evangelism in Japan", 1946年7月17日付
- (28) ライシャワー博士宛ボーベンカーク書簡, 1946年9月17日付
- (29) "Letter From Rev. Henry G. Bovenkerk" to Dr. Reischauer, July 11, 1946
- (30) 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社, 1980年, 419頁
- (31) *The New York Times*, October 10, 1990